



一週間で出版できる！

キンドル電子書籍の作り方

遠藤健二

宝文堂

猫でも分かる電子書籍の作り方

著作権が切れた作品を電子書籍にして、アマゾンで売って大儲け（たぶん）している人がある。「芥川龍之介全作品」だとか、「夏目漱石全集 全一冊」というようなやつだ。

自分も同じことをやりたいと思った。

そこで、ここ数日、「電子書籍 作り方」だとか「電子出版 方法」だので検索して、しこしこ情報を集めていた。アマゾンのマニュアルによると、どうやらキンドル本は、本さえ用意すれば無料で販売できるらしい。しかも印税率は七割。

しかし、売るためには、ワードのファイルのままではダメで、m o b i というアマゾンキンドル専用フォーマットの電子書籍にする必要があるようだ。

m o b i を作るには、E P U B 3 というフォーマットの電書を作成して、それを変換すればよいということまで何とか調べることができた。

このタイミングで、E P U B 3 のファイルを作るためのフリーソフトをダウンロードして試してみたのだが、ひとつ分かったことがあった。

「やばい、むずかしい。面倒くさい」

E P U B 3 を作るには、H T M L と C S S というプログラミング言語の知識が必要なのだそうだ。W E B 小説を書いている人は多いのに、K D P 作家は意外と少ない理由が分かったぞ。

ここで、急きょ予定を変更。E P U B 3 は自分で作らない。誰かに作ってもらおう。

自分で書いたわけではない小説を、自分で電子書籍化せずに売って儲ける。とても悪いことをするような気分だが、出版社というのは、それをやって儲けているのだ。

パブリックドメインの小説を編集し、制作を代行してもらって出版する。これからの方針が定まった。

企画を立てる

さて、方針は定まった。次は企画である。次はというより、この試みでは、企画がアルファでありオメガなのだ。

まずは、どのパブリックドメインの作品を電子書籍化するか選ぶことにする。これには、ひとつ心当たりがあった。

以前、近松門左衛門の「虚実皮膜論」について調べていたときに、この論の出所になっている

文献が、パブリックドメインでありながら青空文庫には入っていないくて不自由したのだ。これを電子書籍化しよう。儲かる予感はなくはないが、誰かの役には立てるだろう。

原稿を用意する

電子書籍化するテキストは、穂積以貫「難波土産 発端」である。

このテキスト、実は全部で十ページもない極々短いものなのだが、大丈夫だろうか。紙の出版では、水増しせずに出せない短さだから電子書籍にする意味があるんだ。と自分に言い聞かせる。

原稿の用意は、以前に「難波土産 発端」をテキストデータ化して保存していたので、楽に進んだ。元となる原稿に、著者の略歴などの解説を付け加えて完成である。だんだん完成形が見えてきて、楽しくなってきた。

電子書籍化を依頼する

電子書籍化をどこに頼むかで、しばらく悩んでいた。

制作代行を請け負っている業者のサイトをいくつか見たのだが、なぜかどこも価格が書かれていないのだ。要相談というやつ。
個人を相手にしてくれるのかどうかも分からない。出版社向けにやってるのかも。

そんな中、[個人向けの電子書籍制作代行を行っているサイト](#)を見つけた。ちゃんと価格も書かれている。しかも安い。

ほかにもいろいろ調べてみたが、とりあえず、1作目はここに頼むことにした。

入稿

原稿をメールに添付して入稿。このあたりのやり取りは、さくさく進んだ。悩まなかったのも、特に書くことがない。

表紙のことを全く考えていなかったのだが、無料で作ってくれるということで一安心。Kindleの表紙は、出版後も変更できるということを教えてもらった。

明後日には電子書籍が完成するらしい。

KDPの登録

予定より一日早く電子書籍が届いた。新書風の表紙画像にも大満足。



[キンドルパーソナル・ドキュメントサービス](#)を使って、電子書籍を自分のキンドルに送信して読む。完璧だ。

今日は、[KDP](#)の登録もした。

しばらく前に、キンドルで電子出版をするときは、税金の関係でアメリカにファックスを送らなければいけないというような話をどこかで読んだが、今はその必要はないようだ。

フォームにちょこちょこ入力していくだけで、あっという間に登録が終わった。明日は用事があるので、出版予定日は明後日にした。

出版と価格の設定

いよいよ、電子書籍の出版だ。

[アマゾン KDP](#)にログインして、「新しい本を作成」を選択する。タイトルや著者名などの情報を入力して、m o b i ファイルと表紙画像をアップロードした。

出版といっても、することはこれだけ。

悩んだのは、価格の決定だ。なんといっても、数ページしかない本である。書籍の説明書きに「十分ほどで読み終わられる短さでありながら」という一文を載せて、さりげなく警告を発しておいたが、あまり高い値段はつけられない。

考えた結果、価格は二百二十七円にした。中途半端なのは、二ドルを日本円に換算したためだ。キンドル本の価格は、日本円で設定してもいいし、海外の通貨でも設定できるらしい。

ここで、予期せぬ問題が発生した。パブリックドメインの作品は、七割のロイヤリティを選択できないらしい。仕方がないので、三割五分のロイヤリティを選択する。二百二十七円の電子書籍が一冊売れると、七十九円の印税が入る計算だ。七割なら印税は百五十八円。やはり、原稿は横着せずに自分で書くべきか。

[電子書籍化代行](#)の費用は一七八〇円だったので、それでも二十二冊売れば元は取れる。四〇〇円の電子書籍を七割のロイヤリティで販売すると仮定すれば、七冊売っただけで黒字化である。「原稿は自分で書け、電子書籍化は人に頼め」だ。

販売開始！

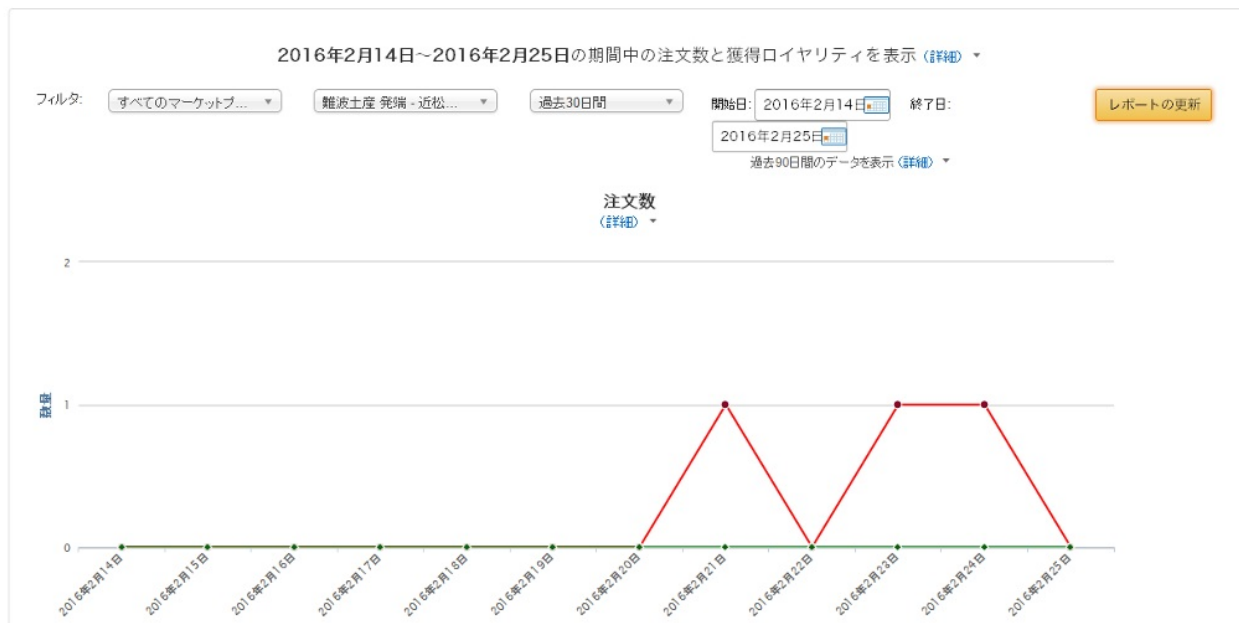
朝起きたら「提出された本がキンドルストアで出版されました。」という件名のメールがアマゾンから届いていた。

いよいよである。

早速、[アマゾンの販売ページ](#)に行って確認してみる。自分の企画した本がアマゾンに並んでいる。何だか不思議な感覚だ。思っていたより、それっぽい出来栄で、欲目かもしれないが、大手出版社の電子書籍と比べても見劣りしない気がする。

出版した後になって、ふと思った。この本って需要があるのだろうか……。誰か買ってくれる人がいればいいのだけど。

売れ行きの報告 出版後、約十日が経った。気になる販売数は……。

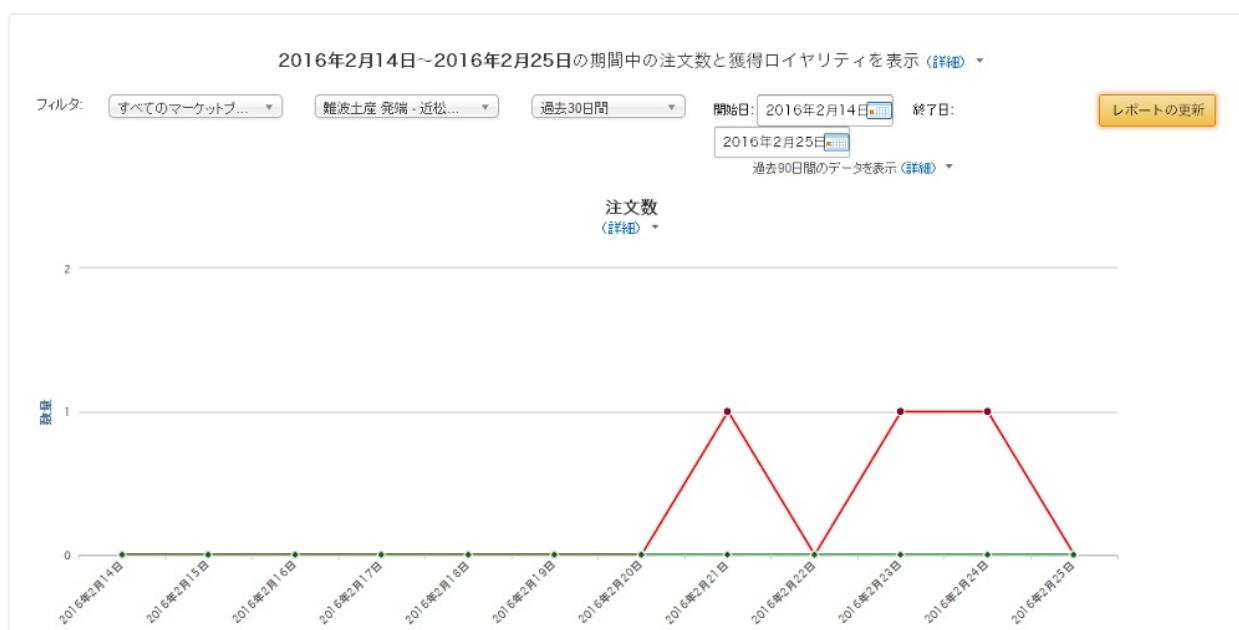


三部！

約十日で三部というのは、多いのか少ないのか分からないが、これだけ渋いコンテンツの有料本が、宣伝も何もせずに売れるのだから、もっと売れ筋を狙えば、案外大儲けも夢じゃないのかもしれない。

一冊出してコツをつかんだので、『[文豪直伝！「小説の書き方」](#)』という本も出版してみた。

一冊目と同様に、パブリックドメインの作品を[前と同じところ](#)に依頼して電書化している。「難波土産 発端」と同じ二百二十七円の設定で、こちらは一週間で七部売れた。



実は、『文豪直伝！「小説の書き方」』に収録した作品は、すべてKindleの無料本でも読む

ことができる。それでも、テーマを絞ってまとめれば、有料でも買ってくれる人がいることがわかった。

著作権の消滅した作品のアンソロジーを編むのは面白い経験だったので、次は、短編小説集を出版してみたいと思っている。

あとがき

あとがき

この本は、初めての電子出版の経緯を綴ったブログを電子書籍化したものです。経緯と言っても、電子書籍の企画から出版まで、かかった期間は、わずか一週間ほど。その後は、すっかり電子出版にハマってしまって、今では二週間に一冊のペースで、新しい電子書籍を出版しています。

すべてを自分でやろうとすることが、電子出版を難しいものにしているように思います。自分で原稿を書かなくても、自分で電子書籍化しなくても電子書籍は作れるんだという気づきが、誰かのお役に立つことを願っています。